

国語

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

令和7年度「共通テスト」は、令和4年度入学生から実施された「学習指導要領」を踏まえた初めての試験であった。「国語」は437,209名が受験し、平均点は126.67点であった。

共通テストの問題作成方針では、学習指導要領に準拠しつつ、言語を手掛かりとしながら、文章の内容を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて、情報を的確に理解したり、より効果的な表現に向けて検討、工夫したりする力を求めることとなっている。また、言葉による記録、要約、説明、論述、話し合い等の言語活動を重視することとなっている。

これらを踏まえ、高等学校「国語」教科担当としての立場から、本年度の試験問題を検討した。なお、評価に当たっては、21ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

第1問 「見る」ことや「まなざし」という言葉をキーワードにしながら、「観光」というものの本質や捉え方について論じた文章である。観光についての様々な研究者の見解を踏まえて述べられている文章であるため、論理を丁寧にたどりながら文章の内容を的確に読み取る力や思考力を確認する上で適切な素材文であった。

問1 漢字・熟語についての基本的な知識・技能を問うている。

問2 「戦略」「演出」という語の理解から、観光地住民の「綱渡り」とも言える観光戦略の現状について、傍線部前後の内容を的確に読み取る力を問うている。

問3 「する」と「見る」こと、「主」と「客」、「旅人」と「観光客」という対比から、観光における「見る」ことの価値について、その内容を的確に読み取る力を問うている。

問4 「ブーアスティンの嘆き」への批判が観光研究の「お定まり」となる中、「ことはそれほど単純でもない」と筆者が言う理由について、その内容を的確に読み取る力を問うている。

問5 本文中に二度用いられている「ともに踊る」という表現について、それぞれの「ともに」が指している内容を的確に読み取る力を問うている。

問6 本文の中心となる「見る／見られる」の関係について、本文全体の文脈を踏まえながら的確に読み取る力を問うている。

第2問 「おじさん」と「母」や「祖母」との関係の観察や、「おじさん」との様々なやり取りから、幼いながらも自身の価値観の変容に至る「わたし」の心情を描いた文章である。短い会話文でのやり取りを中心に、それぞれの人物も「わたし」の視点から巧みに描かれており、心情の変化の把握を中心とした文学的な文章を読み取る力を確認する上で適切な素材文であった。

問1 「探すふり」や「心をこめるように」という表現から、「わたし」が「おじさん」の振る舞いをどのように捉えているのかについて、的確に読み取る力を問うている。

問2 作品の完成度の低さに反して高評価を期待する「おじさん」に対する「わたし」の心情を、傍線部直後の文脈から的確に読み取る力を問うている。

問3 「おじさん」をめぐる発言の端々に見え隠れしている、「おじさん」の生き方に対する「母」と「祖母」との姿勢の違いを的確に読み取る力を問うている。

問4 「がっかり」という言葉の中に含まれる「おじさん」に対する「わたし」の心情の変化について、文脈からの確に読み取る力を問うている。

問5 行動描写による心情表現や、比喩、回想など、文学的な文章特有の表現やその効果について、叙述を基に確に捉える力を問うている。

問6 才能がありながらも周囲から文句を言われ続けている「おじさん」の生き方を自分事として捉える「わたし」の心情を、傍線部前後の文脈からの確に読み取る力を問うている。

問7 ギターやオカリナという楽器をめぐる描写から、本文全体の内容を踏まえながら「わたし」の複雑な心境の変化を的確に読み取る力を問うている。

第3問 課題に対して書かれた【文章】と、異なる種類の複数の資料による、実用的な文章からの出題である。目的に応じて情報を的確に理解したり、より効果的な表現のために工夫したりする力を確認する上で適切な素材であった。

問1 目的に応じて資料を的確に読み取る力を問うている。

問2 目的に応じて資料を的確に読み取る力を問うている。

問3 (i) 資料を読み取り、精査・解釈する力を問うている。

(ii) 複数の資料を踏まえて、【文章】を加筆したり、修正したりしてよりよく表現する力を問うている。

第4問 院政期の成立と考えられている物語『在明の別』と平安時代の物語『源氏物語』からの出題である。いずれの場面も、もののけとそれに苦しめられている人物が描かれており、注や人物関係図を参考にして古文を的確に読み取る力、また、複数の作品を読み比べて理解する力を確認する上で適切な素材文であった。

問1 本文の読解に必要な基本的な語句の知識を問うている。

問2 人物関係の理解に必要な敬語の用法についての知識を問うている。

問3 二つの文章を読んだ後の話合いという学習の場面を通して、以下の力を問うている。

(i) 【文章Ⅱ】の内容を的確に読み取る力を問うている。

(ii) 【文章Ⅰ】の和歌の内容とその詠み手について、的確に読み取る力を問うている。

(iii) 和歌が詠まれた場面を考えながら、【文章Ⅰ】の内容を読み取る力を問うている。

第5問 『論語』の一節、それに対する江戸時代の漢学者である皆川淇園の注釈、その弟子である田中履堂の読書論を素材とする、日本漢文を中心とした出題である。漢文に用いられる基本的な知識や句法を基にして漢文を的確に読み取る力を確認する上で適切な素材文であった。

問1 漢文特有の語句についての基本的な知識を問うている。

問2 孔子が子貢の考えを「擬言」して訊ねた理由について、『論語』の一節や直前に書かれている内容を的確に読み取る力を問うている。

問3 基本的な句法についての知識を活用して、文脈を的確に読み取る力を問うている。

問4 本文を的確に理解するために必要な訓読のきまり、特に漢文の語順や構造についての知識・技能について、文脈を踏まえて活用する力を問うている。

問5 漢文を読むために必要な語句の用法について、現代の日本語における言葉の使われ方と関連させて思考する力を問うている。

問6 漢文の基本的な句法や語句の解釈を根拠とし、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】との相互の関係を比較しながら、論旨ともなる学問や読書についての内容を的確に読み取る力を問うている。

3 分量・程度

(1) 設問数について

試験時間90分に対して大問は5問で、大問ごとの設問数は、第1問が6問、第2問が7問、第3問が3問、第4問が3問、第5問が6問であった。全体の解答数は38で、適切であった。

(昨年度の共通テスト：試験時間80分に対して大問は4問で、大問ごとの設問数は、第1問が6問、第2問が7問、第3問が4問、第4問が6問。全体の解答数は38。)

(2) 難易度について

第1問、第2問とも、本文は高等学校の授業で扱う文章レベルとして妥当であった。また、設問も全体的に適切な難易度であった。

第3問は、本文及び資料とも、高等学校の授業で扱うレベルとして妥当であった。与えられた課題を踏まえ、資料の情報を的確に理解しながら意見文の表現内容を工夫していく過程における各設問は、受験者の思考力・判断力・表現力等を問うものであり、全体的な難易度としても適切であった。

第4問は、本文を含む大問全体の文章量は適切であった。基本的な語句や敬語の用法を問う設問に加え、対話する場面を想定した問3のように、授業における言語活動にもつながる設問があり、全体的な難易度としても適切であった。

第5問は、本文は高等学校の授業で扱う文章レベル、文章量として妥当であった。基本的な漢文の知識を問う設問に加え、複数の文章を比較させる設問があり、全体的な難易度としても適切であった。

以上のように、各大問とも、学習指導要領を踏まえており、分量及び難易度は妥当であった。

4 表 現・形 式

第1問 配点については設問の内容に見合った配点がなされていた。

〔問6〕「観光における『見る／見られる』」ことという、本文の中心となる内容についての理解を問う出題であり、言語を手掛かりとしながら、文章の内容を多面的・多角的な視点から解釈する力を問う、という問題作成方針に合致している。

本文を貫く主題とも言える言葉の理解の質を問う良問ではあるものの、問題作成方針が重視する、言葉による記録や説明、話し合い等の言語活動を意識した形式になっていないため、本問のように本文全体に関わる言葉の理解を問う出題については、そのあり方を検討いただきたい。

第2問 配点については設問の内容に見合った配点がなされていた。

〔問7〕主人公の「わたし」が「おじさん」の楽器を演奏したときに抱いた心情が投影された比喩的な表現に着目し、以前同じように「おじさん」の楽器を演奏したときに抱いた心情との違いについて、正しく読み取る力を問う出題であり、問題作成方針に合致している。

「心情の把握」という、作品に表れているものの見方、感じ方、考え方について解釈する力の育成は、学習指導要領の指導事項として立てられており、受験者にとって日頃の学習活動と結びつきやすいものであるため、こうした力を問う出題においては、より一層の出題の工夫について検討いただきたい。

第3問 表現や用語、図表において受験者の混乱を招くものはなく、適正であった。また、配点についても設問の内容に見合った配点がなされていた。

〔問3〕わかりやすい言葉づかいについて自分の考えを書くために、実社会の中から非連続型テキストも含めた、適切な題材を集めて根拠を補強したり、まとめた【文章】を読み直し、加筆・修正したりするという言語活動を重視した学習場面が設定されており、問題作成方針に合致している。また、「書くこと」の指導事項にもつながる出題の工夫が見られた。

(i)は、生徒が書いた【文章】の主張の根拠を明確にするために、新たな資料から必要な情報を取り出そうとする場面、(ii)は自分の【文章】を読み直した生徒自身が、目的や意図をよりよく伝えるために加筆・修正する場面をそれぞれ想定した設問であった。問いのリード文の中で示されている学習活動のねらいを十分に理解していないと正答の判断が難しいため、解答に苦慮した受験者がいたと思われる。「書くこと」を想定した言語活動ではあるものの、リード文を正しく理解する「読むこと」の力も求められる出題であった。

第4問 表現や用語において受験者の混乱を招くものはなく、適正であった。また、配点についても設問の内容に見合った配点がなされていた。

〔問3〕もののけとそれに苦しめられている女性が登場する【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】の共通点と相違点に着目し、生徒たちがグループ内で話し合いをすることで、本文の理解を深めていく学習の過程が意識されており、問題作成方針に合致している。二種類の文章の共通点や相違点の検討から、【文章Ⅰ】の和歌を中心とした内容の考察を経て、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】の関係性についての理解へ至るといふ、枝間の(i)から(ii)、(iii)へと連続的に展開する形式は、受験者にとって日頃の学習活動と結びつきやすいものであったと考えられる。

第5問 表現や用語において受験者の混乱を招くものはなく、適正であった。また、配点についても設問の内容に見合った配点がなされていた。

〔問6〕学問に対する考え方について論じた皆川淇園の文章内容とその弟子である田中履堂が著した文章の内容を読み比べ、両者の共通点や相違点について考える力を問う出題であり、問題作成方針に合致している。しかし、問題作成方針が重視する、言葉による記録や説明、話し合い等の言語活動を意識した形式になっていないため、出題のあり方について検討いただきたい。

5 ま と め（総括的な評価）

「新教育課程」を踏まえて初めて実施された本年度の共通テストは、文章やグラフの情報を的確に理解する力や、よりよい文章にするために内容を捉え直したり、根拠の示し方について考察したりする力等を問う大問が新たに加わり、五つの大問で構成される試験であった。出題については、知識の理解の質を問う問題や、言語を手掛かりとしながら、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題が、生徒の学習の過程を意識した場面設定も行われながらバランスよく出題されている。実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力の育成を目標とする「現代の国語」と、我が国の言語文化への理解を深めることを目標とする「言語文化」の二つの共通必修科目を通して身に付けた力を評価するのに適当なものであった。他方、「旧教育課程」履修者に対する試験問題としても、十分に学習の成果を見ることが出来るものでもあった。本テストが、今後より一層、高等学校での学習を通して受験者が身に付けた力を評価するのに妥当なものとして作成され、また、高等学校国語科の授業づくりに資することを期待して、意見・要望を以下に示す。

- (1) 「新教育課程」に沿った問題作成がなされており、学習者による「主体的・対話的で深い学び」を踏まえた設問が出題されている。第3問における実社会に関する題材について、集めた情報を吟味したり、文章の構成や展開を工夫したりする設問や、第4問における二つの文章の共通点と相違点について、グループ内で話し合い、内容の解釈を深める設問は、いずれも学習の過程を意識した設定であり、「現代の国語」及び「言語文化」における平素の学習活動を通して身に付けた力を評価することができるよう工夫されている。
- (2) いずれの大問においても、本文が比較的平易で適量であり、試験時間内において、テキストの細部を検討したり全体の要旨を把握したりしながら設問の意図を捉えて選択肢を吟味すること

が可能であったと思われる。大問が五つとなった一方で、設問については、大部分が4択での出題であり、受験者に対する一定の配慮が見られた。他方、第1問の間5、間6、第2問の間7における選択肢は、本文の的確な理解を前提として、それぞれの選択肢に含まれる要素や用いられた言葉を丁寧に吟味することが求められるものであった。本文の深い理解に加え、選択肢の吟味が求められるこれらの設問に対して、受験者が十分に思考し、判断する時間が確保されるよう、今後も慎重に検討されることを求めたい。

- (3) 本テストは、「言葉による見方・考え方」を働かせ、「言語活動」を通して、生徒の総合的な言語能力を育成するという学習指導要領の趣旨を再認識させるものであった。常用漢字、語句の意味、訓読のきまりなどの〔知識及び技能〕は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」を通して学ぶものとして、従前、高等学校の授業において大切にしてきたものであり、一定数の出題がなされたことは歓迎される。第5問の間5では、漢文で用いられる語句と現代語との関連を図った出題とするなどの工夫も見られたが、取り扱う語句の妥当性について、十分な検討が行われるよう求めたい。第3問における「わかりやすい言葉づかい」をテーマとして、自ら題材を決めて資料をまとめ、自分の考えを書く学習課題の設定、第4問における後世に影響を与えた作品とそれを取り入れながら独自の場面を作り出した作品とを素材として、共通点と相違点を話し合う言語活動の設定、第5問における我が国に特有のものの見方・考え方と中国との関係を知るとともに日本人の考えが漢文を通して表現される機会が少なくなかったことに気付かせる素材の工夫などは、授業改善あるいは生徒の探究的な学びにおいて大いに示唆に富むものであった。
- (4) 全体を通して、高等学校での学習履歴を踏まえた上で、高校生が読むのにふさわしい多様な題材が用いられている。今後も複数の登場人物の心情や人物像に迫ることができる文学的な文章、様々なテーマに関して高校生が視野を広げ、考えを深めることのできる論理的な文章、現代の社会生活において高校生が考察するのにふさわしいテーマについて、多様な文体や様々な図表等を伴って書かれた実用的な文章、文種や形態の異なる古典が素材として幅広く検討され、用いられることを期待する。出題に当たっては、素材の魅力や価値を十分に生かし、受験者がテキストから得た情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、文章を書いたりする力を発揮することのできる設問が、高等学校における学習の過程を意識した設定のもと、すべての大問においてバランスよく出題されるよう工夫していただきたい。共通テストにおける出題が高等学校国語科における授業改善を促し、実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力を生徒に育成し、我が国の言語文化に対する生徒の理解を深めることに資するものとなるよう期待する。